

国際教育の時代到来

—— コミットメント醸成についての一考察 ——

佐藤 進

(京都大学大学院経済学研究科)

The Advent of International Education *A Study of the Cultivation of Commitment*

SATO Susumu

(Graduate School of Economics, Kyoto University)

1. はじめに —— 変化の時に原点を求める

何の分野であっても、大きな変化が研究を原点に引き戻して、研究者を古典に向かわせるようなときがあると考えられる。私は、自分のもう一つの専門分野である経済学については、今がまさにそのような時ではないかと思う。日本とアジアから世界に広がった大不況が、好況と繁栄の持続を予言してきた各種理論の破産を引き起こしているが、その中には、古典経済学が初歩的に教えているものを単に看過したためであることがめずらしくない。例えば、「経済とは生き物だ、市場に聞け」ということが今更言われている事実は、「経済とは人間の主観を超えた客観的運動体である」という、18～19世紀の経済学者たちが到達した科学的認識から、あらためて学び直すべきものの多いことを示唆している。

私が直接に従事している留学生教育（留学生に対する教育・指導と、留学生が自ら進んで学び取るという両方の側面を含んだ言葉として「教育」を使っている）は、70年代あたりから世界的に急激に広がってきた国際教育の代表的な部分として位置づけられる。私は教育学全般について多くを知るわけではないが、拡大した国際教育の実践に対応する理論といえば、国際化現象についての外面的説明が加わる程度で、教育論の内実はいずれも旧来の教育論の次元を越えてはいないように思われる。国際教育について見るかぎり、現代教育理論もまた、現実の変化に対処しかねているところがあるのではないだろうか¹⁾。

そこで、教育においてもやはり —— 少なくとも国際教育に関する限り —— 『エミール』の著者にならって²⁾、その原点に立ち帰ってみなければならないのではないかと私には思われるのである。留学生教育の範囲内では、留学生とは何か？彼らは何を求めているのかという問いに、国際教育という広い領域について言えば、今日の（各国）青年たち³⁾は、教育に何を求めているか？という問題にである。本稿の課題の一つは、その答えに接近を試みることである。

次に、この問題は、私たち教員に最も身近な、「教室内教育の技術」としての教育と深い関連があると思われる。教室の中で教えるさいの課題の多くは、実は学生が勉学に対して抱く心構え、いわば「教室に入るところがまえ」「教室を包む期待」によって大部分が果たされている、または大きく支えられている、と私は考える。したがって、その心構えの醸成こそが、教室内教育を含む、教育全体の最大のポイントの一つとされなければならない。ところが「ところがまえ（コミットメント）」は、学生自身が求めるものと、密接に結びついているにちがいないのである。コミットメントが国際教育との関連においてどのように醸成されるかは、本稿のもう一つの検討課題であり、その项目的なとりまとめは「8. コミットメント醸成の条件」に記しておいた。教育現場において、私自身が、その醸成過程と思われるものをどのように応用したかについては、別稿があるので参照していただきたい⁴⁾。

2. 青年たちが告げる国際教育時代の到来

国際化時代を生きる決意

今日の青少年たちは、私たち教員の幾世代が成長した時期とは異なり、国際化が日常的に目の前で（外国などに行かないまでも——国内僻地でさえも）進んでいる時代に生きている。したがって、当然、彼らが就職して働く舞台は、国内であれ国外であれ、国際化された社会、すなわち国際社会なのである。国内全体には外国の影響がほとんど無いか、その影響が微弱で、「国際社会」といえば外国であるか、国内でも沿岸の大都市などの特定地域に限られていた時代、外国語が話せ、外国人と付き合うことができる人はまだ特別な人で、本来の日本人らしくないと見られていた時代、こういう時代は今、急速に過去のものになろうとしている。そこで、青少年は例外なく、国際化時代を生きる決意を迫られている。「国際化の日常化」は必要なら数々の事例をもって示すことができるが、ほとんど言うまでもない客観的事実として、ここでは、最近のエピソード一つを紹介するにとどめたい。

「日常化した国際化」の一事例

今年、日本国民、特に若い人たちを珍しく熱狂させたのは、サッカーのワールドカップであった。日本代表チームが第2戦をクロアチア代表チームと戦ったときに、日本から若者3万人が、人口20万人の都市である、フランスのナント市に押し寄せたといわれる。国内では庶民が1円でも出費を控える、この大不況の時節にである。

ワールドカップに登場する多くの名選手は、ふだんは別の国のチームに高い報酬で雇われてそこでプレーをしている。つまり「出稼ぎ」をしている。クロアチアのキャプテンをしていたストイコビッチもその一人で、最近では日本のプロチームで働いている。彼はユーゴが分裂し内戦になったとき、家族のために帰国して銃を手に戦うと言ったところ、父親からあくまでサッカーを続けることが国のためだと諭され、後ろ髪をひかれる思いをしながらプレーを続けてきたという。そして戦火の国元にお金を送り、また、サッカーのプレーを通じて祖国の人々を励ましてきた。人口わずか5百万人、しかも内戦の地から遠く出稼ぎして働く選手たちが、ワールドカップのために寄り集まってつくったナショナルチームであったが、日本チームをうち破ったばかりか、初出場ながら、とうとう全出場チーム中、第3位にまで上りつめた。クロアチアの人々の誇りはどんなに大きかっただろうか。日本チームもその多くのサポーターも、このようなチームと堂々と戦ったことを今では内心誇りに思っているのではないだろうか。私たちは、こうした「国際化したナショナルチーム」の活躍を、眠気さえ我慢すれば、夜、生放送で見ることができるのである。

教員と学生のズレ

このように、我々の生活環境（経済、社会、文化など）は、国際化のただ中にある。私たち教育者の幾世代は、この急激な国際化過程を、比較的程度の少ない以前の状況から、国際化現象が日常生活となった今日の状況まで、順次展開するのを見てきている。しかし、私たちの学生たちは、今までになく国際化が急速に進んでいるこの時期に、日々目の前に国際化を感じながら成長している。同じように国際化を見聞き経験しているとはいいながら、教育者と学生との間には、ズレがあるのに注目しなければならない。この分では、21世紀はどこもかしこも、文字通り「国際化社会」となるにちがいないが、その社会の担い手になるように我が学生たちは運命づけられている。

国際化は誰の目にも日常化しており、その速度は時とともに速まっている。それが政治経済など、社会のそれぞれの分野でいかなる発展を遂げているかは、各分野の学問が立証するであろう。教育学の立場において注目すべきは、国際化の進展という客観的過程を、学生たちが、きわめて敏感にまた深刻に捉えている、その感性であり、悟性である。学生たちの感性や悟性は、学生たち自身にとっては彼らの主観に属するにせよ、教育にとっては非常に重要な客観的条件である。彼らは、私たちよりもはるかに国際化が徹底した社会に生きる覚悟を迫られているし、また進んでそれに立ち向かおうとしているのである。すなわち、「国際的に役立つ人」になりたいと願っているのである。教育は、個々の教育者が好むと好まざるとにかかわらず、それに応えなければならない⁹⁾。

3. 日本における国際教育の一大実験：留学生受け入れ10万人計画

留学の大量化は国際教育時代の到来を表現

留学生教育は、あらゆる人が対象となり得る国際教育全体にとっては、対象となる学生数からいえば、ごく一部を

構成するに過ぎない。にもかかわらず、留学生教育は国際教育の諸問題をきわめて鮮明な形で見せてくれる。留学は学生にとって国際教育を経験する最も直接的な方法であるし、留学生を受け入れる国にとっては、留学生とともに国際関係を、大学に、地域に、直接持ち込まれることになるからである。留学生を受け入れる国においては、教育の中身においても、外国人にもわかり、外国人とともに行う教育が必要となってきた。留学生を受け入れ、教育するということが、従来の教育との質の違いを否応なく表面化させはじめたのである。

日本において21世紀入りとともに留学生受け入れを10万人にしようという意欲的な政策、いわゆる「10万人計画」は1983年に始まった。90年代に留学生受け入れは格段の量的拡大を示し、日本の内部での教育を自然なものとして受けとめてきたあり方（後述「国民教育」）を相対化する要素の一つとして成長し始めた⁹⁾。90年代後半に入ると、日本とアジアの経済危機が深刻化する中で、我が国が受け入れる留学生が初めて減少傾向になるなど、アジアの留学全般は試練の時期を迎えている。しかし、経済危機自体も、それに対する対策も国際化している現状では、結局のところ、留学など国際教育の発展は抑えられはしないだろう。

日本において留学生受け入れが大量に行われたのは、今世紀初頭に清国留学生を受け入れたのに次いで二回目に当たる。しかし、清国留学生教育の経験は記録の上にしかなく、伝統として今日まで継承されているとは言い難い。実際には、「10万人計画」の取り組みが唯一の経験と言っているであろう。この経験から汲むべきものは多いはずであるが、教育論の見地からすれば、「純化された国際教育」あるいは「実験としての国際教育」の経験という観点で捉えるべきだと考える。国際教育は、日本人学生も同様に歴史的課題として直面するようになっているのだが、日本人教員対日本人学生という関係においては、新しい課題が表面化しにくい。それが外国人学生という素材を得て、表面化し見やすくなった、という意味である。日本人学生についても、「国際教育の時代が到来」しているのである。

巨大な留学希望者の裾野

今日は、社会の発展が、また、それにともなって科学の発展が、急激な国際化という経路をとって行われている時代である。その発展経路にいち早く乗ろうとする試みが行われるのは当然であり、それが留学というような形式をとらせている。留学とはヒトの動きだというのでは同義反復の説明でしかない。留学生の存在は、世界を知りたい、そのためにはできれば留学してみたい、と思ってはいても実行するまでに至らない、何倍も多くの学生たちの存在を意味している。留学できないでも、国内にとどまっても世界は知ることができる、世界に通用する人として自分を形成してゆくことは可能だ、自分をそのように導いてほしい、と思う人はさらに何倍も多くいる。これが国際教育の土台をなしている。今まで「国際」に縁のなかった人々が知識欲、好奇心を満足させるために、外国語を学びに、あるいは観光旅行の形で外国を訪れる。企業内教育、生涯教育の対象者を含めれば、さらに広範囲の人々が国際教育の対象者として数えられるだろう。最近では、日本から退職後の海外留学が急増しているとも伝えられている。小中高の生徒で、夏休みなどにホームステイに行く数まで入れて算出できるならば、日本において、驚くべき国際教育熱の高まりがあることが、数字の上で表現されるだろう。

4. 国際教育とはなにか

目標：国際的に役立つ人になる

国際教育とは、「国際的に役立つ人になることを目標とする教育」である。ここで私は、「教育」を「教える」と「学ぶ」双方の能動的行為という意味で使っているのである。留学生教育は、本来、こうした目標のもとに双方の能動的立場が成立しているという意味で、国際教育を直接に体现しているといえることができる。しかし、日本に生まれ育った日本人であっても、その生育環境は、時代とともにますます国際色を強めている。最近では、少し世代が変わるだけでも、前の世代にくらべて後の世代は、目に見えて国際人的特徴を帯びるようになってきているようである。日本内部の経済・社会・政治などが著しく国際色を深めていることを背景にして、衣食住を輸入品が占めるなど、生活の物質的基礎まで国際化してきているからである。生活そのものが、国際化がとめどなく進む時代に生きていることに若者たちを目覚めさせるのである¹⁰⁾。

さまざまな役立ち方がある

「国際的に役立つ」といえば、「国際ビジネスに役立つ」ということを連想する向きが多いかもしれない。たしかに国際ビジネスは今後さらに広く深く人々の生活を捉え、それだけにまたビジネスへの従事者を多く必要とすることになるだろう。しかし、ビジネスであっても、またビジネスでなくても、およそ今まで国内に存在した多くの職種が国際版として現実化する可能性がある⁸⁾。アジアの学生たちを惹き付けた日本の経済発展について言えば、資本主義経済発展のアジア版として、彼らの国の将来に参考になるからであるが、経済発展が生み出した諸問題についても学ぶことができる。例えば、今日アジア各地域に猛烈な速さで広がっている公害問題については、公害を減らす装置の導入のような、後追いの技術的研究にとどまるのではなくて、公害問題の発生原因そのものや、公害反対運動なども、研究対象になり得る。以上は、ビジネス以外にも多くの「役立つ道」のあることの例にすぎない。

「国際的に役立つ」とはある人々にとって言えることで、他の人々にとってはそうでないこともある。対立する利害関係の下では、一方で役立つことが、他方にとっては害になる場合さえ、数多く存在し得るだろう。国際化も矛盾した発展経路をたどることは、国内的発展が矛盾したものであったことと変わるものではない。そのことは、資本主義経済の発展が、国内的にも国際的にも、貧富の拡大をもたらした事実一つをとっても理解されよう。対立関係の存在を認めた上で、国際化は必然だということである。その中で、どのような国際化を求めて生きるかは、個々の学生の人生行路の選択の問題であろう。

「国際的に役立つ」ためには語学だけであればよいとか、外国をよく理解できればよいというだけのものではないことはすでに述べてきたことから自明であろう。「国際的に役立つ」とことと裏腹の要件は、「国際的なアイデンティティの確立」である（後述）。

国民教育の発展としての国際教育

上記の目標をめざす国際教育の内容とは何か？それは、青年たちが、国際化の必然的流れを明確に認め、その方向に合わせて、スムーズに自ら人間形成を出来るように、導くことである。したがって国際教育は、従来の支配的教育形態である国民教育とまったく対立するものではなく、人間形成を目標としてきた国民教育の発展上にあって、国民教育の時代的狭さを乗り越える課題を持っている。歴史的には、国民教育は、封建制を打ち壊したフランス革命などの近代ブルジョア革命が、封建的地域割拠をうち破る統一国家権力を成立させたところに生まれている。資本主義経済が封建的地域割拠の制約から解放されて、まずは国境線まで、さらにはそれを越えて広がって発展する中で、その原動力としての産業革命の担い手、資本家と労働者という「人づくり」を、近代国家は行わなければならなかった。こんにちの国際教育は、近代革命が生み出した近代経済、政治、社会、文化などが、さらに一段と広い範囲まで発展して、互いに国境を越えて広がるのが日常生活化する段階に至ったことを意識の中に取り込んでいる。国民教育の国際教育への発展は時代の必然的な流れである。

「国際的」と「地球的」の区別

最近では、どこでも、「国際的 ; international」という言葉よりも、「地球的 ; global」という言葉のほうが好まれているようである。地球的というほうが人類的というニュアンスを感じさせ、より国家的偏狭さから脱皮しているように感じさせるからである。しかし、この「地球的」という言葉は、各国の独自性、主体性を否定する響きを伴っている。クロアチアのサッカー選手たちが国外で離ればなれに生活しながら、いざとなればまとまって活躍する現実が示すように、ナショナリズムとか、ナショナルな利害関係は現実のものであって、幻想ではない。ナショナルからグローバルへ直接に飛躍できる場合もあるだろうが（例えば、最近の地球温暖化問題とか、エイズなどの疫病への対策は、まずは地球的に問題を捉えなければならないだろう）、しかし、その上で、現実的な対策といえば、個々の国の実状を他国の実状と比較対照し、組み合わせるといふ国際的方法しかないのである。しかるにグローバリズムが最初から支配的事実であるようにいうのは、ある国の国民的利益を否定しようとする場合のイデオロギーとして利用しやすいからであることが多い。グローバリズムとはアングロアメリカニズムだといわれるのは、かなり当を得た把握といえようである。国としての独自性を認めながら、しかもそれを国を超えた広い視野で相対的に捉えること、これを表現する言葉としては、「国際的」が最も適合している。

ヨーロッパにおける事例

国際教育の具体例は、ヨーロッパに求めるのがわかりやすい。ECは高等教育の「エラスムス計画」、もっと広い世代を含む「ソクラテス計画」など、各種のプロジェクトを着々と実施してきた。「エラスムス計画」は1987年6月に始まった。EC委員会は次の5項目の目標を掲げ、ECからの助成金交付によって各国大学の事業への参加を誘導してきた⁹⁾。

- (1) 他のEC加盟国の経済や社会に関する体験をもつ人的資源を確保するために、EC加盟諸国の大学に修学する者が在学中のある期間を他の加盟国の大学における履修に当て、その履修の一部として認める学生流動化計画へ参加できるように平等の機会を保障することによって、参加学生数の顕著な増加を達成する。
- (2) 全加盟諸国の大学間の広範かつ緊密な協力の促進
- (3) 世界市場におけるECの競争力を強めるねらいのもとに、大学教員の流動化を促進し、EC加盟諸国の大学のもつ潜在的可能性を全面的に活用することによって、大学の教育・訓練の質を高める。
- (4) EC市民という意識 (the concept of a People's Europe) への統合をめざす、加盟諸国市民間の交流促進。
- (5) EC共同体レベルの経済および社会の諸分野における協力関係強化の基礎を築くため、共同体内協力事業へ参加した体験をもつ大学卒の人材プールを確保する。

ヨーロッパの動きは、内部的には国境をできるだけ取り払おうとする動きではあるが、ヨーロッパの外に対しては、ヨーロッパ・ナショナリズムとでも形容できそうである。つまり、地球主義にはなっていないのである¹⁰⁾。European dimension とは、ヨーロッパ国際教育の方向を総括する基本理念である¹¹⁾ が、その実体については、日本やアジアなど他地域の国際教育研究者によって十分に研究されるべき課題だと思われる。

5. 国際教育に対する理解の事例 — 大学審議会の場合

国民教育的発想を乗り越えられない

大学審議会の「21世紀の大学像と今後の改革方策について — 競争的環境の中で個性が輝く大学 — (中間まとめ)」1998年6月30日が国際教育についてどのように取り扱っているかを見てみよう。

同報告は、「課題探求能力の育成」の一環として、「国際舞台で活躍できる能力の育成等」(p. 39) を挙げ、「外国語教育の充実や海外留学の推進等を進めると同時に、我が国の歴史や文化への理解、国際社会の直面する重要課題への認識を深めたり、ディスカッション、ディベート等の訓練を通じて自らの主張を明確に表現する能力を育成するなど、国際舞台で活躍できる人材の養成を図ることが重要である。」と述べている。外国語教育や海外留学はともかく、我が国の歴史文化の理解等については、国際舞台で多くの日本人が外国人と語るときに無知を思い知らされてきた経験を率直に認めて書かれたのかもしれない。だが、それは、もとはといえば、「国内舞台」の問題なのである。むしろ、国際舞台に立つ場合の他は我が国の歴史や文化に関する教育を考えようとししない「お国柄」こそが、国際社会に通用しないものとして、問題とされなければならないだろう。特にディベート能力などだけが「活躍能力」のではなく、国際的視野でものを理解し、国際的感覚で直感できる訓練が必要なのであるが、それは一部の「国際舞台で活躍する人材」をつくるためばかりではなくて、国内であれ、また誰であれ、基本的素養として必要とされる時代が日本にも来ているからなのである。

その意味で、教養教育において「学際的・総合的視野」(p. 35) を強調するならば、「国際的視野」をも並べて入れてはどうだろうか？むしろその方が、「学際的・総合的視野」と互いに支え合い、互いを実現しやすくする組み合わせになるのではないだろうか？同じことは大学院教育についても言える。「幅の広い視野と総合的な判断力を備えた人材の養成」(p. 49) の「幅の広い視野」には「国際的視野」を積極的に含意させたらどうだろうか？

留学生受け入れについての消極的記述

本報告の見地は、実用を重視するあまり、系統性と全面性を欠いているところがあるように思われる。例えば、上に引用した箇所は日本人の学生だけを意識して書かれているようだが（外国人学生であっても、「国際舞台で活躍できる能力を育成」されなければならない）、外国人留学生の力が、大学国際化の方向で本当に活かされるようにすべきだというような、手元に持ち合わせながら十分に使われていない「人的資源」については、まったく言及がないの

である。

本報告は国際教育に関する独立した箇所を設けたつもりのものであるが、それは資料を除く本文107ページのうち、1ページにも満たない一節「国際交流の推進」(p. 77) だけである。そこには、国策として遂行されてきた「留学生受け入れ10万人計画」の実施が、目標を達成すべき21世紀初頭を目前にして困難に直面していること(他の政府諮問委員会において分析が行われている¹²⁾にしても、ここには、なぜかまったく言及がなされていない)、深刻化したアジア経済危機は、アジア各国青年のための留学はもちろん、教育全般をおびやかしていること、それに対して我が国の政府や大学がどのように立ち向かわなくてはならないか等については、まったく触れられていない。「今後、国際社会で知的リーダーシップを発揮できる国」をめざす大学づくりを呼びかける意見書としては、「国際社会」をいかなるものとして認識しているか(その説明も与えられていない)首をかしげざるをえない。我が国がその一員であるアジアは、日本が受け入れている留学生の9割がそこから来ているにもかかわらず、この「国際社会」の中には入っていないのだろうか。ついでに言えば、報告に一貫して使われている「社会」とは、「日本社会」としか読むことができない。「競争」概念としては、国内よりも国際競争が意識されており、その競争に勝つために大学の変化を求める社会の要請が強調されている。競争相手としては先進国、守るべきは日本社会の利益という基本関係とともに、書き手の国民教育的立場も、叙述の中に明かである。

外国語による教育だけを強調

留学生教育の内容に直接にかかわる記述としては、「外国語によるプログラムの実施」が「留学生にとって魅力ある教育プログラムの実施」として掲げられている。これは短期留学制度を前提にする場合としては理解できるが、国際的に役立つ力とか、国際的アイデンティティの形成という観点からすると、留学先の言語を抜きにした留学は、どれほどの意義があるだろうか? 特に日本への留学の場合は、日本語なしには、留学生生活そのものがきわめて不自由でつまらないものに終わる恐れもある。短期留学の場合も含めて、効果的な(外国人のための——後述)日本語教育を編成する意義はいくら強調されてもされ過ぎることはないと思う。

6. 学生の最終的利益：国際的アイデンティティの確立

何を教えるかの判断基準

私は英語または日本語のどちらか一方をとるべきだと言う立場ではない。「学生を国際人として育てるためには何が必要であるか」を基準にして判断すべきだと言いたいのである。

私自身、留学生向けの大学院クラスは英語で講義とディスカッションを行うことにしている。大多数が中国人で、日本語が達者であるにもかかわらずそうするのは、ほかならぬ中国人学生もそれを希望しているためであり、また欧米系の学生たちにとっては、日本語でも支障のない学生でさえ、英語の方が気持ちが安らぐようである。留学生は授業やゼミに日本人と一緒に参加している。日本語の聞き取りと発言に緊張を重ねているので、留学生用の私のクラスでは「鎧を解きたい」気持ちになるのであろう。私も、彼らがリラックスして活発な発言ができるように、あえてこのクラスだけは英語で行うのである。しかし、私のクラスでは特にそうするとはいえず、私は、彼らがあらゆる労力を払って日本語を身につけるべきだという考えであり、それはクラスの学生に対しても明言している。日本語は彼らが将来世界のどこに暮らそうとも、彼らの強みの一つになるだろう。

中南米出身の学生が、「日本へ来てから自分の国ではほとんど使わなかった英語(国ではスペイン語だから)を話すのに慣れた。日本人の学生は知り合っても次に会うと知らない顔をされることが多いので、日本語を話す機会があまりない。英語を通してではあるが、ほかの国から来た留学生たちと友達になれてよかったと思っている。」という。案外、非漢字圏から来た学生たちに共通する感情ではないだろうか。非漢字圏からの学生たちには、当否はともかく、大学入学後の日本語教育に対する欲求不満——もっと会話と聞き取りができるようになってくれたら、日本での生活は不便が少なかっただろうに、という観念——を抱いている様子をしばしば見かけることがある。

教育内容の国際的アイデンティティ

あるアジアの留学生は、『自分たちは、将来、これで生きていけるのだろうか、今のうちに、自分に欠けているも

のを身につけなければいけないのではないだろうか』といつも不安でいっぱいだ。日本へ留学して、その不安はかえって強まっている。特に、他の国へ留学した学生たちと自分の国へ帰って顔を合わせた時に、それを感じる」と訴えている。学生たちの根本的な期待に応えることが教育の基本であるとすれば、国際教育の面でその期待はどのように表現するのが妥当だろうか。

学生が外国人であれば、卒業して母国に帰ってから、あるいは、他のどこかの国で働くことになってから、「日本で学んだからこそ、自分にはこの良きアイデンティティがある」と誇り得るものを、思う存分に学び取らせよ。これが私の主張である。留学先の語学修得はわかりやすい例である。しかし、語学だけではない。専門科目においてもそうである。しかしながら、何の科目であれ、国際的に見て、教育や研究の内容にいかなる意義があるかを教員が知り、またその意義を外国人学生も理解し納得しなければ、国際教育とはならないのである。例えば、同じ日本語を外国人が学ぶ場合でも、日本語教育が「外国人のための日本語」または「外国語としての日本語」として教えられず、日本人学生に対する「国語」として教えられるだけならば、効果も少なく、したがって身につけにくいだろう。

すなわち、教育内容そのものについても、それを学ぶ国際的意義（アイデンティティ）が教員学生双方に自覚されていなければならない¹⁰⁾。もし十分な自覚があれば、学生は、大きな困難があったとしても、それを突破して学びとり、自分自身の中に新たなアイデンティティとして取り込もうとするだろう。

以上は留学生を想定して述べているが、日本人学生についても、他に適切な事例こそあれ、本質的には同じことが言える。

7. 日本における国際教育の意義

日本の蓄積を活かす

国際的に見て日本の大学のレベルが低いという人もいるが、京都大学ひとつとってみても、世界に誇るべき無数の研究成果がある。留学生たちの研究は、ほぼ例外なく、日本における研究の蓄積を、自分の立場で主体的に活かそうとすることになっている。二、三の例を挙げてみよう。

ペルーから来ているセノン君は地震工学を研究している。ペルーは日本から見て太平洋プレートの反対側に位置する地震国であり、日本のすぐれた地震研究の成果を吸収してペルーへの適用を図り、ひいては同地で研究を発展させる必要がある。こうした事情の自覚の上に、彼の研究は成立している。スペイン出身のロサリアさんは満州移民について研究している。スペイン自身が植民地との間で多くの移民問題を経験している。それを背景にした関心に基づく研究であり、京都大学の満州に関する資料と研究の集積を駆使している。台湾から来ている白君は中国美術史を京都大学において研究しようとしているが、これも台湾（故宮博物館）と京都大学に蓄積された資料と研究の成果を基礎とする研究になっている。

こうした事例は枚挙にいとまがない。日本にはアジア研究という分野に限らず、広範囲な分野を通じて、アジアにおいては群を抜く研究の蓄積がある。経済学分野で、中国からの留学生たちが現代の中国を研究対象に選ぶのはよくあることだが、それは日本の現代中国研究そのものによるばかりではない。ひとつには、日本には発達した経済と、研究の蓄積とを背景に、分析の角度、方法に、母国や他国のそれとはちがう、独自性があるからである。

蓄積の再発見

日本には、国内的にはほとんど究めつくされたと思われるにもかかわらず、観点を変えれば世界的意義をもっており、また観点を変えた研究としては日本の過去の到達点でもまだ不十分であるような研究課題は、数多く存在していると思われる。

一例を挙げよう。日本において農業は今や比較的小さな経済部門であるにすぎない。では日本農業についての研究は意味がないのだろうか？日本はかつて世界の中でも典型的な小規模集約農業による農業国であった。それが世界でも代表的な工業国の一つに変わり、世界で最も極端な食料対外依存国に変わった。しかも農業経営上の基本問題の一つ、零細農民経営は、我が国政府や多くの農業学者が大規模農家育成を長年にわたって唱えているにもかかわらず、依然として未解決なのである。今、かつての日本と同様な急激な歴史的変化——工業の発達と農業の衰退——が、アジアその他の発展途上国において繰り返されているとすれば、日本の歴史的経験をあらためて総括して、それぞれの

国に教訓として活かすことは、緊急の課題になっているのである。

学習・研究態度の変化

日本経済を学ぶということは、清国からの留学生を受け入れた当時から今日まで、アジアその他発展途上国の課題であった。長い間、植民地として収奪と抑圧の中におかれていた結果として、封建制などの後進性から脱却できない状態では、日本での資本主義の急速な発達とそれにとまなう近代化は、それ自体が学ぶ対象であった。今日、日本とアジア資本主義経済の危機が深刻化するなかで、留学生が日本で経済学等を学ぶ契機には、変化が生まれてしかるべきだろう。アジア資本主義経済の発達が深刻な不況を生むほどに達し、その不況が日米など、先進国経済の強い影響下で発生したのを見れば、アジアの青年たちが経済発展をバラ色に描いてばかりいるわけにはいなくなる。留学生にも、今後は、今まで以上に冷静で客観的科学的な学習・研究態度が目立つようになるのではなかろうか。

8. コミットメント醸成の条件

コミットメントの要件

私たちが学生の勉学の動機を引き出し、彼らが自らを律する態度を自分の内に作り出すのを手伝えるならば、そういう学生が並んだ教室は、そうでない学生ばかりの教室に比べてどれほど教えやすいことだろうか？残念ながら、その方法を明確に述べることは、教育の実践も研究も不足している私の手に負えるものではない。しかし、これだけは言えるだろう。学生が勉学の対象に魅力を感じるのは、それが学生の心にあるものに触れた場合のことであって、学生の心にはないものに働きかけても学生が惹き付けられることはありえないのである。私は、今日の学生が一般的に抱いている重要な関心の一つとして、「国際教育を受けることによって国際人として将来役立ちたい」ということがあると思う。そこで、国際教育に関する限りで、コミットメントが学生の心の中に醸成されるための要件とは何かを考えてみよう。それは、これまでに述べてきた国際教育の要件が、学生に自覚されることを意味する。

- (1) 国際化の急激な進展が国際教育を不可避にしていることの自覚
- (2) 教育（勉学）目標：「国際的に役に立つ人になる」ことの自覚
- (3) 日本に蓄積された経験と研究の成果を国際的観点に照らして吸収し活用することの自覚
- (4) 自由で自発性を発揮できる条件が与えられること

以上は、コミットメントが学生の心に醸成される諸条件である。コミットメントそのものは、個々の学生の心情とか、教育者の教育のアートにもよりながら、個性的な具体的な様相をもって出来上がるものと思われるが、ここでは、そのための必要条件のみを挙げている。

(4)は、とにかく教育に限らず、どの分野でも規制の多い、我が国特有の留意点である。一般的に言って国内的規制が及ばないところが国際的舞台の特徴であり、国際化とは、このような意味で国内的規制とか干渉からの自由化という意味を、もともと含んでいる。留学生が海外で自分の力を伸ばしてみようと決断するとき、母国のしがらみから解放されるとともに、自分の力が発揮できるという意味で、行った先での自由が与えられていることが暗黙の前提になっている。従って、例えば、大学による「留学生に対する生活指導」といった考え方は、留学の意義とは本来的にかみ合わないのである。

要件(1)(2)(3)が実現しても、(4)を欠くならばコミットメントは実りにくいだろう。学生たちは、自分の力（特性、過去に形成したアイデンティティ）を十分に発揮することによって、新しい力、新しい特性を形成して過去のものに付け加えようとする。ここで自由とは、それにふさわしい環境条件としての自由を指している。

教員と学生の協力による再発見と創造

裏返しに、教員の側から学生に対して与えるべきものとは何だろうか？今までに教えてきた対象（教科の内容）が大きく変わるものではあるまい。しかし、同じ教育の対象に対して当てるスポットライトは、今まで（国民教育的観点）とは異なる角度にならざるをえない。これまでに述べてきたように、その教育の国際的意義、国際的アイデンティティを発見する必要があるからである。重要なポイントは、大学の教員と、教育を受ける当の学生自身が、互いに努力して、この日本において行われる教育と研究に、国際的意義を再発見することである。両者の協力によって、コミッ

トメントが、どのように、またどの程度に生み出されるのかは、教員学生両者の創造的実践にゆだねられるであろう。その古典的な一例を次に掲げることによって、本稿の結びに代えたい。

「小は中国のため、大は学術の発展のため」

発展途上国が急速に発展して先進国の仲間入りをすること、それは魔法ではないが、魔法のような魅力を、発展途上国からの学生たちに与える。しかし、科学を実際に学んだ後は、留学生の意識はそこにとどまらないで、当然に深まりを見せるはずである。

日本が留学を受け入れる原点となった時代のことである。清国から日本へ派遣された多くの留学生の中に、魯迅がいた。彼は中国へ帰国後、歳月を経て、日本で受けた恩師（仙台医学校、藤野先生）の懇切丁寧な教育を、折にふれて思い出すことになる。なぜ先生は自分をあれほどまで励ましてくれたのだろうか？ 魯迅は、振り返ってみると、それは、「小は中国のため、大は学術（医学）の発展のためであった」ことがわかる、と書き遺している¹³⁾。教員から留学生への、科学的探求そのものを善とする、気宇の大きい向学心と研究心の伝播、それこそが国際教育の神髄であり、真の利益を母国にもたらすものである、と魯迅は示しているように思われる。魯迅は、先生が示してくれた気宇の大きさが、後にいつまでも、苦境にあるたびに彼を奮い立たすことになったと書いている。

注

- 1) 例えば、一見、国際教育そのものを扱っているかのように見える異文化コミュニケーション論や多文化教育論さえも、「文化の異同」に注目することで、かえって他国の国民も自国の国民と同じように取り扱って差し支えないとする論理になっているように見受けられる。異文化とか多文化とかの概念に異国または外国という要因はカウント済みであるとされているようである。これらの理論は、もともと米国のように、国内エスニック問題が目に見えて明らかな国において、いわば国内問題の解決を探る問題意識を背景として開拓された、同一の国民経済（したがって同一の政治、社会、したがってまた同一の歴史的発展段階）の上に立つ異文化論なのである。この大前提を忘れて、理論を国際間に適用すると、奇妙な誤りをまねがれない。例えば、日本において留学生を相手にして、このような理論を身につけたカウンセラーがしばしば失敗するのは、外国人を事実上「問題多い日本人」扱いをしてしまう結果であることが多い。関連した他の問題については佐藤 進「留学生教育とはなにか？ — その専門性と役割について —」『留学生教育』創刊号、1997年を参照。
- 2) 「人びとは幼少年期というものを少しも知らない。だから誤った考えにもとづいて進めば進むほど迷ってしまう。もっとも賢明な人たちでさえ、大人の知るべきことだけに気を配って、子供が何を学ぶのに都合のよい状態にいるのかは考慮しない。彼らはつねに子供のうちに大人を求め、子供が大人になる前はどんなだったかは考えもしない。わたしがもっとも心を用いたのはまさにこのことの研究なのであり、たとえわたしの方法がすべて空想的で間違っただとしても、必ず人がわたしの考察を利用できるようにとはかったのである。わたしは何をなすべきかについては、誤った見方をしたかもしれない。しかし実行すべき主題は正しく見たと信じている。したがってまず、あなた方の生徒たちをもっとよく研究することから始めるがよい。というのはどうしてもあなた方は生徒を知らないからである。」ルソー『エミール』序文（平岡 昇訳、河出書房新社）。
- 3) ここで「子供」や「生徒」を「（現代の）青年」とか「外国人留学生」に、「大人」を「日本人（教育者）」に、「幼少年期」を「青年たち（留学生たち）の育った環境」に置き換えて読んでみていただきたい。
- 4) 本文中、しばしば青年という表現を学生よりも広い対象を意識して使っている。しかし、学ぶ心がある人ならば、肉体的には老人であっても、「青年」であるとして読んでもらいたい。すなわち、学ぶ心がある人ならば青年なのである。これに対して「学生」は高等教育機関に通う学生のことである。
- 5) 佐藤「留学生と協力して創造する国際教育」経済学教育学会編『大学の授業をつくる — 発想と技法』青木書店、1998年。
- 6) 教育学者によっては、とかく国際化について、外面的な現象にすぎない「ヒト、モノ、カネの移動」でもって説

明する場合が見られるが、説明にしては程度の低い内容の（他分野からの）引用にとどまっているというべきである。教育学において重要なのは、それが学生たちの主観にどう反映され、それによって彼らが何を求めようとしているか、という点である。

- 6) いわゆる「留学生受け入れ10万人計画」については、21世紀への留学生政策懇談会「21世紀への留学生政策に関する提言」（1983年8月）に始まり、留学生政策懇談会「今後の留学生政策の基本的方向について」（第一次報告）（1997年7月）に至る政府諮問委員会による一連の報告を参照していただきたい。上記文献のうち、最近の「基本的方向について」は、「留学生交流の意義」を大略以下の項目にまとめている。

① 我が国と諸外国との間の友好信頼関係に貢献

② 各国の教育研究基盤共有による世界的教育研究の発展を促進、我が国高等教育機関の教育研究への刺激、地域社会、企業の国際化

③ 開発途上国の人材養成

なお、大学審議会『21世紀の大学像と今後の改革方向について——競争的環境の中で個性が輝く大学——（中間まとめ）』（1998年6月）にも「国際交流の推進」として関連した記述がある（本稿の後述5. を参照）。

- 7) 私は外国人留学生も、年ごとに出身地の変化を反映して変わってきているのを感じてきた（佐藤『未来に生きる君たちと——留学生教育論に寄せて——』京都大学経済学部、1992年）。彼らの出身地の変化発展もまた、国際化の影響を強く受けているのである。
- 8) 80年代以来、アジアに対する投資が相次いだ中で、後継者不足に悩む多くの伝統産業の技術がアジア各国に流れ出た。日本人技術者が現地の人に日本の伝統技術を教え込む姿は日常茶飯事となった。
- 9) 江溯一公『大学国際化の研究』玉川大学出版部、1997年、176ページ。次のパラグラフの「エラスム」に関する項目(1)から(5)までは、同文献からの引用を一部佐藤が短縮した。
- 10) ヨーロッパ諸国の国際教育専門家は European Association for International Education（ヨーロッパ国際教育協会）と呼ばれる組織に結集している。
- 11) 江溯、218ページ。
- 12) 留学生政策懇談会「今後の留学生政策の基本的方向について」（第一次報告）1997年7月。
- 13) 一帰国留学生の回顧を紹介してみよう。（任 太彬「帰国留学生の就職——日本留学の回顧」『留学交流』vol. 10 no. 8 1998）

「特に私自身、建設業に従事する上で、日本建設業界の長短所と変遷過程、そして今後の発展方向などについての研究に専念できなかったことがもっとも残念だ。…留学時代の、研究分野に限られたミクロ的な考えと発想の足りなさを痛感している。…私がこのように感じるのには、いくつかの理由がある。

第一に…一般の人々に日本を紹介したくても体系的で論理的な説明が不可能で、断片的でしかない。第二に、…専攻分野と関連してももう少し幅広く直接・間接的な経験を積む必要があるということの後輩達に聞かせてあげたい。第三に、留学時代に幅広い人間関係を築けなかったということだ。…」

- 14) 「…こうして、（別れを惜しみ、手紙をくれるように懇望した藤野先生に対して魯迅は——佐藤）そのまま現在まで、ついに一通の手紙、一枚の写真も送らずにしまった。彼のほうから見れば、去ってのち杳（よう）として消息がなかったわけである。

だが、なぜか知らぬが、私は今でもよく彼のことを思い出す。私が自分の師と仰ぐ人のなかで、彼はもっとも私を感激させ、私を励ましてくれたひとりである。よく私はこう考える。彼の私にたいする熱心な希望と、倦まぬ教訓とは、小にしては中国のためであり、中国に新しい医学の生まれることを希望することである。大にしては学術のためであり、新しい医学の中国へ伝わることを希望することである。彼の性格は、私の眼中において、また心裡において、偉大である。彼の姓名を知る人は少ないかもしれぬが。

彼が手を入れてくれたノート、私は三冊の厚い本に綴じ、永久の記念にするつもりで、大切にしまっておいた。不幸にして七年前、引っ越しのときに、途中で本箱を一つこわし、そのなかの書籍を半数失った。あいにくこのノートも、失われたなかにあった。運送屋を督促して探させたが、返事もよこさなかった。ただ彼の写真だけは、今なお北京のわが寓居の東の壁に、机に面してかけてある。夜ごと、仕事に倦（う）んでなまけたくなる

とき、仰いで灯火のなかに、彼の黒い、やせた、今にも抑揚のひどい口調で語りだしそうな顔を眺めやると、たちまちまた私は良心を発し、かつ勇気を加えられる。そこでタバコに一本火をつけ、再び「正人君子」の連中に深く憎まれる文字を書きつづけるのである。」（魯迅（竹内好訳）「藤野先生」『世界文学体系62』筑摩書房、1958年）